闇からの魔手　その 16

「ここへ来る前に、リキゾウさんのところで修行したの、五年間みっちりとね」
　明けの光の女神に仕える武術担当のリキゾウ。かつて珠美がけたぐりをかました相手だ。
「ほぉ……あの筋肉の塊にも人を教えるだけの脳味噌がついていたのか」
　タミー・オロチは物事を一から十まで全て嘲笑して愚弄せずにはおかない。師匠を侮辱されて珠美は気分を害した。
「貴様のような下種に比べれば数億倍もマシだ！」
　右手の中剣を一閃すると、迸り出た気がタミー・オロチを激しく打ち据えた。
「ぐはっ……！」
　タミー・オロチは全身をぐらぐらさせた。
「これは参った……降参してタミーの身体は明け渡すしかなさそうだ……」
「降参だと？　何の策略だ？」
　珠美は一瞬たりとも気を緩めることはなかった。
「策略などない。これほど君が強くなってしまった以上、無駄な抵抗をしても文字通り無駄だ。タミーほどの素材はそうざらにはないが、仕方がない」
「やけに諦めがいいじゃないか」
「誰が諦めると言った？　一時撤退するだけだ。私は未来永劫、地獄の果てまででも、執拗に君を負い続けるぞ、タマちゃん。覚悟しなくちゃならんのはそっちの方だ」
　タミー・オロチはニヤニヤしながら、両手を広げた。
「さあ、タマちゃん、仕上げをしろ！」
　珠美は左右の剣を突き出して、そのまま上へ突き上げた。タミーの身体に差し込まれたのは気のエネルギーのみで、剣の刃先は彼女から何センチも離れている。その動きにつれて、イニシエのオロチが引きずり出されて虚空に浮き上がり、タミーの肉体から完全に分離した。続いて珠美が交差する軌道で互い違いに剣を振り払うと、バツ印に気の光が拡散して、イニシエのオロチの二股に分かれた頭部と胴体が三分割された。

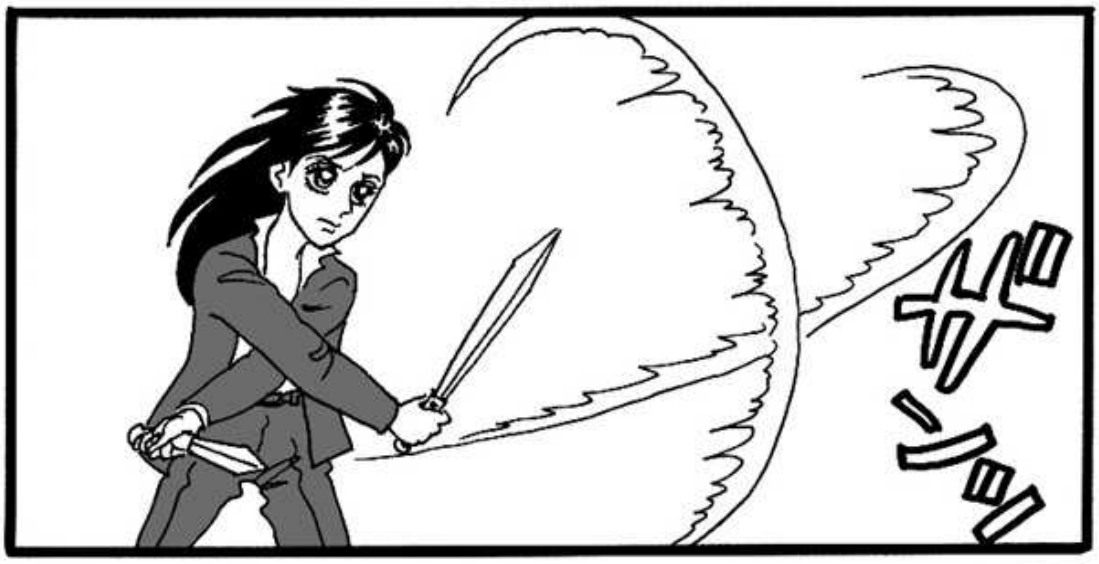
――今回は完膚なきまでにやられたな……。

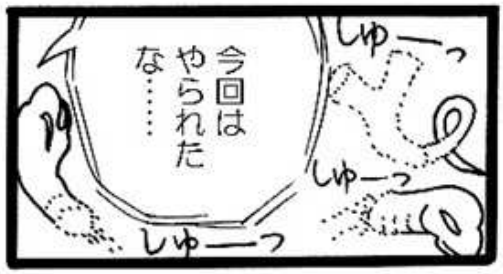
二つの頭の片方が雄で、もう一方が雌である。胴体が逸早く消失していく中、同じように姿が薄れつつある雄の方が呟いた。

――一先ずおさらばね。次に再生するのはおおよそ五百年くらい先かしら……。

――なあに、五百年なんぞ、あっという間さ……。

二つの蛇の頭も、空気中に溶けるように消滅し、静寂が訪れた。


ズーン


今回はやられたな……
しゅーっ
しゅーっ
しゅーっ

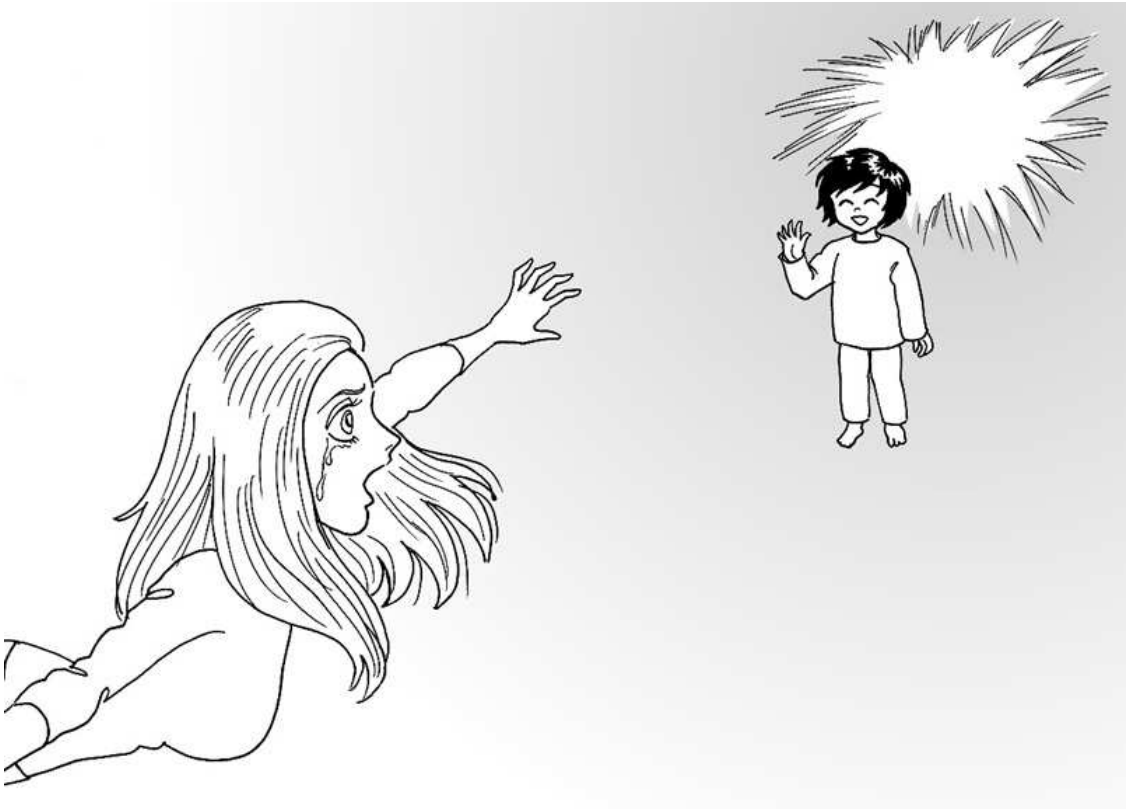
次に再生するのは五百年位先かしら……？
しゅーっ

なあに
五百年くらいあっという間さ……

すっ

シャキン

牢獄の鉄格子が消滅した。
「やったね、タマちゃん……」
タミーはゆっくりと立ち上がった。
「さあ、マリカ、お家へ帰れるわよ」
手を引こうとしたが、まりかは退いた。
「ううん。そっちへは行けないわ」
「どうして？　ママとパパのところへ帰るのよ」
「だって、まりかもう死んじゃったから」
「えっ？　そんな……」
「でも、タミーのおかげで寒くなかったよ。恐くなかったよ。ありがとね」
まりかの柔らかい唇が、タミーの頬に微かに触れた後、二人の距離はどんどん離れていった。
「待って！　行かないで、マリカ！」
「大丈夫。あっちにはじーじとばーばが待ってるから」
にっこり笑ってまりかは手を振った。
「じゃーねー、タミー。バイバーイ」

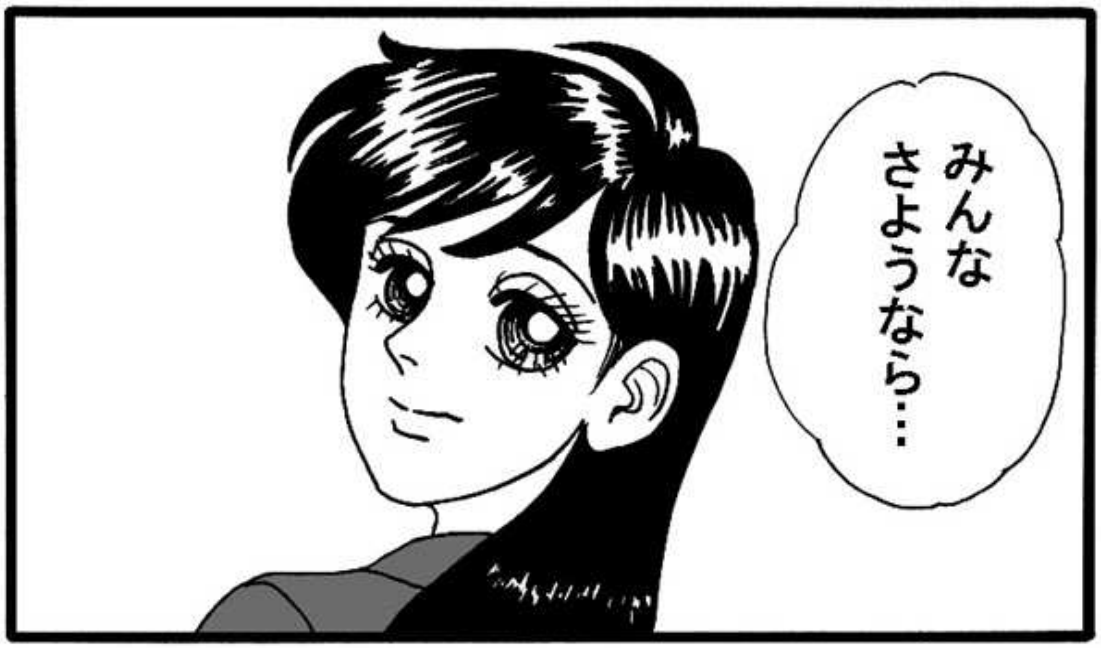


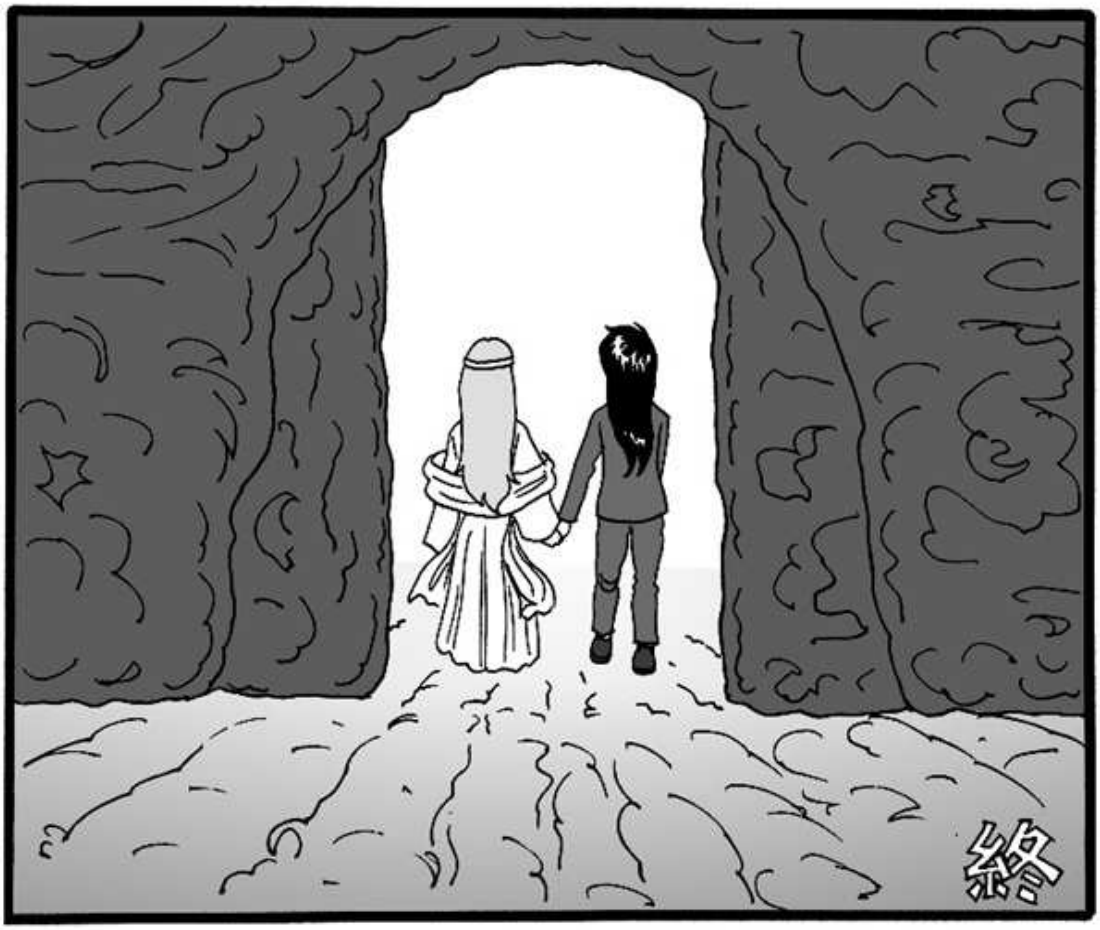
――マリカ……！
　溢れ出す涙が止まらないまま、タミーはホテルのベッドに横たわっている自分を発見した。
「よかった、タミー。無事に元通りね」
　傍らに腰を降ろしている珠美が顔を覗き込んだ。
――動けない……声も出ない……。
「あ……無理しないで。多分、肉体と魂が引き離されたショックのせいだわ。美咲ちゃんの時もそうだったみたいだから。身体に力が戻るまで何日もかかるそうよ」
　タミーはまりかのことを想ってひたすら涙を流し続けた。
「児玉くんにメールしといたから、すぐに駆けつけてくれるわ。しばらく入院よ」
　タミーの携帯を操作した珠美は電源を落とすと、自分の指紋を念入りに拭き取った。
「それじゃあ、私もそろそろ行くわね」
――行くって、どこへ……？
「私もう死んじゃったからね。一度だけっていうことで『半霊半物』になったけど、それももうおしまいよ。私は普通の人間として生きて普通の人間として死ぬのが望みだから、不老不死には興味がないわ。こうして一度若返ったからもうそれで充分。板倉珠美の人生はもう終わったの。あの日、自宅の部屋で、大量の血痕だけを残して遺体は跡形もなく消失したということにでもすればいいわ。今日、この部屋にも私は現れなかった」
――もう死んじゃっただなんて、マリカと同じことを言うのはやめてちょうだい……！
　叫びたくても声にならない。タミーはかろうじて身じろぎしながら口をぱくぱくさせた。
「元気でね、タミー。幸せになってね」
　珠美はタミーの額にキスをした。
「えへへっ。……やっぱりアメリカ人みたいにチュッっていい音させられないわねぇ」
　照れ笑いを浮かべるその顔はいつものタマちゃんと変わらないのに……。
――ＮＯ、タマちゃん、ＮＯ！
　愛すべきタマちゃんの姿はもうどこにも見えなかった。

幸せに
なってね
タミー……
えへへっ
やっぱり
アメリカ人
みたいに
チュッってい音
させられないわねぇ
待って……
行かないで
……！

　どこまでも続く岩場に聳え立つ崖。第一の扉の前に現れた珠美は後ろを振り返った。
――みんな、さようなら……。
　扉のすぐ脇にセーラー服姿の小女神ちゃんが立っていた。
「アケノ様……わざわざお出で下さらなくても……」
　珠美は恐縮した。
「私たちの間柄で水臭いことは言いっこなしよ」
　小女神ちゃんは手を差し出した。
「さ、行きましょ」
　手をつないで歩き出す二人の前で扉は開いた。通り抜けて進むにつれて、小女神ちゃんは羽衣を纏った明けの光の神の姿に変わっていった。そして、眩い光の残像を残して、扉は閉ざされた。

終


みんな
さようなら…


終